蒼穹（そうきゅう）のニュルンベルク

――フェイク（偽物）――

30代半ばのころ、アムステルダムの土産物屋で、運河の絵を買った。運河には解（はしけ）が行き交い、両側には旧い建物が並ぶ。はがき２枚ほどの大きさの細密画だった。
同行のオランダ人のケイザーが「そんなまがい物（fake）は買うな」とばかり顔をしかめたが、わたしは気にもしなかった。「気に入ったから安物でもかまわない」と、２万円くらいで買い求めた。

自宅の階段の踊り場に絵を掲げてから、数年が過ぎた。はじめは気にもならなかったが、次第にこの絵の安っぽさが目障りになり、ある日物置小屋に放り込んだ。

ちょうどこのころわたしも40代になり、趣味や嗜好が鋭敏化して、ウソウソしたものや、ギラギラしたものが生理的に疎ましくなった。
絵だけでなく、音楽も、書物も、果ては毎日の通勤路さえ、自分の好みがはっきりし始めた。

家からＪＲ駅に向かう通勤路には二つのルートがある。
以前は大通りを抜けて駅に向かった。加齢につれ、いつしか畑の脇道を抜け、楢（なら）や椚（クヌギ）の小径を通り、竹の茂る細い遊歩道を通うようになった。夏にはビワの実がなり、秋には神社の境内で銀杏（いちょう）の実を拾う子供たちに出会う。遠回りだが、自動車の激しく行き交う大通りよりずっと心地よい。

この程度なら趣味の問題だからよいが、ついには人の好き嫌いも激しくなる。仕事上やむを得ないとはいえ、表裏のある者、強欲な者、口舌の徒などとは、一緒に仕事をするのも相手方にするのも疎ましい。

若いときは偽物の絵であろうと気にならなかったし、粗野な連中とも群れてそれなりに面白かった。猥雑な都会に住んでも、むしろそれを楽しんできた。
だがもうそれができない。小さな趣味、小さな好き嫌いこそ、心の安らぎのために必要だ。
そういう思いが強くなる。

――ローマ帝国の小さな宝石箱――
スペイン子会社の監査終えて、マドリードから小型機に乗り、ニュルンベルクに降り立ったのは夕方近くだった。ここでは、ドイツの子会社の監査を行う予定だった。

ホテルに向かう車の中で、わたしはすぐにこの街の心地よさを感じ取った。それはバロックの名曲を思わせた。

子会社の２日間の監査は問題なく終わり、わたしはニュルンベルクの散策を楽しむことができた。
ニュルンベルクは、フランクフルトの南東200キロ、ミュンヘンの北方150キロに位置する。中世の面影を色濃く残した美しい街である。当時の人口は50万人。古くは「神聖ローマ帝国の小さな宝石箱」と称された。

痩せた土地ながら、勤勉で商才に長けた市民は、この街を中世ドイツの有数の商業都市に発展させた。中世の神聖ローマ帝国は首都を置かず、皇帝は城から城へと渡り歩いていたが、ほとんどの皇帝がニュルンベルクに滞在した。
神聖ローマ帝国会議がしばしば開かれ、帝国の財宝が保管され、帝国の「隠れた首都」だった。

ニュルンベルクを異常に好んだヒトラーは、党大会をここで開催し、「ニュルンベルク法」を制定してユダヤ人を弾圧した。
それが不幸をもたらした。連合国の空襲は激しく、旧市街の90％が破壊された。
戦後はナチ戦争責任者に対する「ニュルンベルク裁判」がここで開かれた。戦争犯罪人は、13階段を降りた庭の一隅で、絞首刑に処せられた。

この不幸な歴史にもかかわらず、ニュルンベルクは中世の美しい街並みを復活させた。
特に古い城壁に囲まれた旧市街は、良き時代の雰囲気を今に伝える。
空へ高く伸びる塔、石畳、遊歩道、教会、広場、噴水、市場、城壁など、街のどの一角を切り取っても絵画的である。

中でも「白なめし職人小路」（ヴァイスゲルバー・ガッセ）には木骨の家が並び、心地よい

ハーモニーを醸しだしている。木枠に煉瓦、土、漆喰を詰めてつくられた木組みの家は、白壁に赤茶や灰黒の柱と梁と斜材が交差して、美しい図形を織りなす。その色と形のコントラストは、見飽きることがない。
この街は足早に歩むところではなく、石畳を一歩一歩ゆったりと散策する街である。

――中央市場にて――
ニュルンベルクを楽しむのに、ガイドブックはいらない。気の向くまま旧市街を歩めば、必ず見るべき光景がある。

視線をあげれば、小高い丘に「皇帝居城」と「ジンヴエル塔」が見える。蒼い空をバックにそびえ立つさまは、一種壮観である。

皇帝居城は旧市街の北に位置し、この街のランドマーク。この城は11世紀には礎が築かれた。
城内の礼拝堂はロマネスク様式の２階建てで、上層が「皇帝礼拝堂」である。
近くの深井戸の小屋や官房事務所は、古い木骨建築で見どころの一つ。

そぞろ歩きをしていると、いつか中央広場に至る。
広場の一角にそびえ立つ重厚な建物が、14世紀に建てられた「聖母教会」。「皇帝の栄誉、聖母への敬い、死者の安寧」のために皇帝カール４世が寄贈した。
幾重もの装飾を凝らした入口が、この教会の特徴である。正面入り口の上には仕掛け時計があり、毎日12時になると選帝侯７人の人形が回転する。教会の中では、マリアや聖人を描いたステンドグラスが美しい。

広場の片隅には、高さ17メートルの「麗(うるわ)しの泉」がそびえ立つ。泉とはいうが、八角形の塔である。たしか、昔は井戸があり、水が湧き出た名残である。

中央市場の朝市では小さな屋台が立ち並び、野菜、果物、チーズ、ソーセージなどを商う。
レープクーヘン（香料入りクッキー）、フェッツェルブロート（ドライフルーツ入りパン）、焼きソーセージ、グリューヴァイン（香料入りコケモモ酒）などは、冷かしに見て回るだけでも楽しい。

年末にはクリスマス市が開かれ、海外からの観光客を含め200万人が訪れる。

「聖母教会」と「うるわしの泉」を背景に、クリスマスツリーが夜の闇に浮きあがる様は、喩えようもなくロマンチックだという。

夕闇の中、旧市街を散策しながら考えた。この心地よさはどこからくるのだろう？
一人で街を歩くのが、なぜこんなに愉しいのだろう？
そう思って眺めると、無用な広告、看板、電柱などがなく、神経に触る騒音もない。
人々が景色を楽しみながら、ゆったりと歩くように街がつくられている。

もちろんそのためには厳しい規制がある。野放しの広告、景観を損なう電柱・電線・広告は厳しく規制されているに違いない。電柱・電線は、コストがかかっても地下に埋めるのだろう。ドイツでは19世紀末に田園都市計画が構想され、緑の自然の中で潤いのある生活を楽しむ運動が始まった。その成果である。

――豊かさとは――
帰国して東京に降り立ち、わたしは今更ながら落胆した。
日本の大都市はどうしてこうも猥雑なののだろう。秩序美に欠けるのだろう。萩、倉敷、角館のように、地方には美しい小都市があるが、大都市は無秩序で乱雑で、とても生活する場所ではない。

香港、バンコク、台北などは、無秩序で雑然としているがそれなりに一つの雰囲気を醸し出している。
東京は十分な経済力があるにも拘わらず、街並みは乱雑で猥雑である。
所狭しと乱立する赤や黄の極彩色の看板、のぼり、たれ幕、無数の電柱や電線…。
コンクリートで固めた電柱が乱立し、低空には10本、20本の電線が縦横に走る。ビルの屋上にはダークカラーの給水塔や原色の広告塔が建ち並ぶ。

視界を遮る物は何もなかったニュルンベルクの蒼穹と比べると、東京の街も空も夾雑物に溢れている。
街には街宣車ががなり立て、パチンコ店はマイクのボリュームをいっぱいにして行進曲を流す。駅のマイクは「空いた入り口からお乗り下さい」などと、いわずもがなの騒音をまき散らす。

目障りな障害物と無用な騒音の中で暮らしていると、それが当たり前になってしまう。わたしたちは神経症の時代に生きている。静かな街に住むことの心地よさを、忘れてしまった。

竹林を渡る一陣の風に秋を感じた、日本人の感性はどこへ行ってしまったのか。経済的効率を追い求めるあまり、わたしたちの感性はいつの間にかザラついてしまった。その事にわたしたちは気がつかない。日本は本当に「豊かな社会」であろうか？